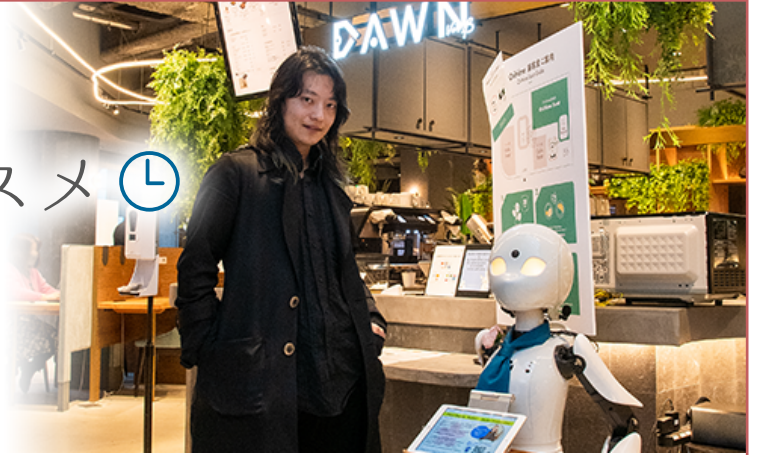


賢いはたらき方のススメ🕒

吉藤オリイさん



病気や身体的な問題、単身赴任、育児や介護、そして精神的なストレスなどで行きたいところに行けない、会いたい人に会えない人はたくさんいる。それらの課題を、分身ロボット「OriHime」を介して、人と人がコミュニケーションできる環境づくりを進めている吉藤オリイさん。きっかけは自身のひきこもり経験にあった。「“がまん弱い”からこそ、できないことをロボットを介してできるようにしたい」とロボットの開発を続ける吉藤さんが実践する、頑張りすぎない、社会参加、コミュニケーションの大切さについてお話を伺った

はじめは、自分を客観的に見つめられたひきこもり経験

— 小さい頃から、折り紙や工作が得意だったと伺っています。どのような子ども時代でしたか。

吉藤: 工作や自由に何かを作ることが大好きでした。折り紙が好きになったのは、モノ作りが好きだった祖父から教えてもらったことがきっかけです。小学校低学年の時は、段ボールや折り紙を使っておもちゃを作って、友達と一緒に遊んでいたんです。しかし、小学校高学年になると、みんなの興味がおもちゃではなくなってきました。私は工作は得意でも、ほかの人が普通にできることができなかつたり、人と話が合わない、教室でじっと座って授業を受けているのが嫌だつたりなど、ほかの人と違うということに悩み、強い劣等感を持っていました。



— 3年半ほどひきこもりになっていたというのは、その頃からでしょうか。

吉藤: そうですね。もともと風邪をひきやすかつたり、病気がちでした。小学校5年生の時に、最愛の祖父が亡くなったことをきっかけに、それまでの悩みがストレスとなって積み重なり、体調を崩して入院したんです。ますます同級生との距離ができてしまい、少しずつ自分の居場所がなくなっていました。

中学生になってからも、体調を崩して休むことが多く、登校してもほとんど保健室にいました。いじめもあり、学校になじめなくなっていたんですね。実は、父親が同じ中学で進路指導を担当している熱血教師だったので、父親もいろいろとやりにくかつたと思います。父に対して本当に申し訳ない気持ちで、焦燥感や劣等感が増していきました。

私は、なぜ学校に行くんだろう、なぜ好きじゃない勉強をするんだろうって、疑問がたくさん頭の中にあつて、その疑問に対して納得できる答えがないと行動できないタイプだったんです。つまり、「がまん弱い」のです。納得しないと先に進めませんでした。それがストレスとなって精神的にも弱くなっていました。

賢いはたらき方のススメ ㊦

— ひきこもり時期はどのように過ごしていましたか。

吉藤: 無力感ですね。寝たままずっと天井を眺めていたり。将来のことを考えると不安になって怖かったですね。人間は想像力があるから未来を考えてしまう。私の場合、未来を考えているとネガティブになっていくんです。自分のことが客観的に見えるようになるとなおさらです。衝動的に命を絶とうとする自分と、それをさせない自分がいて、葛藤していました。誰も味方がいないと思って孤独で。なんとか自分で自分を愛さないといけない、“自分育て”をしないといけないと。とにかく迷惑をかけないように生きていこうと思っていました。

人生が大きく変わったのは、 ロボットが見つないでくれた恩師との出会いから

— ひきこもりから抜け出せたきっかけは何でしょう。



吉藤: 一番のきっかけは、母親が「折り紙ができるのならロボットも作れるはず」と、ロボット大会に申し込んでくれたことです。出場した地区大会で優勝し、1年後に大阪で開催されたロボットフェアで各地域の優勝者のトーナメントがあり、参加しました。そこで、会場内を一輪車で走りまわるロボットに出会ったんです。そのロボットに興味を持って、開発者の話を聞いてみたいと思いました。そのロボットを開発したのが、地元の高校の先生、のちの師匠となる久保田憲司先生(※)でした。久保田先生のロボットは画期的で、お話も面白くて夢中になりました。

※久保田憲司先生

奈良県立王寺工業高等学校でモノづくりクラブを指導、「奈良のエジソン」とよばれた人。平成18年度文部科学大臣優秀教員表彰を受ける。

— 久保田先生との出会いで変わられたのですね。

吉藤: 久保田先生に弟子入りすれば、道が開けると思いました。そこからは久保田先生がいる奈良県立王寺工業高等学校をめざして必死に勉強しました。目的ができると何のために勉強をするのかがわかり、力を発揮できるんだと気づいたんです。人生で一番勉強をした1年間だと思います。

— どのような高校生活でしたか。

吉藤: やりたいことができるのが楽しくて、毎日ロボット開発に没頭していました。でも、人とのコミュニケーションは苦手だったので、工業高校を卒業したら、町工場の職人になろうと思っていました。人に迷惑をかけずに自立して自分を活かせる方法は、職人に弟子入りして黙々と何かを作り続けることだと思っていたんです。でも、チャンスをもらい、いろいろな出会いがあって、今があります。

— いろいろな出会いのなかで今につながるきっかけとなったのは？

吉藤: アメリカで開催されたインテル国際学生科学技術フェア(ISEF)に、日本代表として出場したことです。久保田先生が率いる開発プロジェクトに参加して、車いすを開発しました。この車いすは人が乗れるロボットで、オープンカーのような形をしています。プログラムで動かすことで、乗ったままの状態でも思い通りに動かすことができます。改良を重ねて、高校2年生のときに、高校生科学技術チャレンジ(JSEC)に参加したんです。このコンテストで文部科学大臣賞を受賞し、翌2005年にISEFに日本代表として出場し、3位に輝きました。ISEFは科学技術を志す高校生のオリンピックのようなもので、世界80以上の国や地域から1800人ものファイナリストが集って、研究を発表します。

賢いはたらき方のススメ ㊦

— とても大きなチャンスですね。世界の高校生たちとの集いはいかがでしたか。

吉藤: みんな自信に満ちあふれていて、「**僕はこの研究のために生まれてきたんだ**」と言う高校生がいたんです。それはリップサービスかもしれませんが、そんな価値観に初めて触れて、**使命感を持っている高校生**がいるんだということに驚きました。宇宙の話をや々としている人とか、オタクがたくさんいましたが、**とてもうらやましく見えた**んです。会場には、2002年にノーベル物理学賞を受賞された**小柴昌俊先生**もいらっちゃって、小柴先生はじめ、科学者の方たちが**とても楽しそうだった**のも大変印象に残っています。

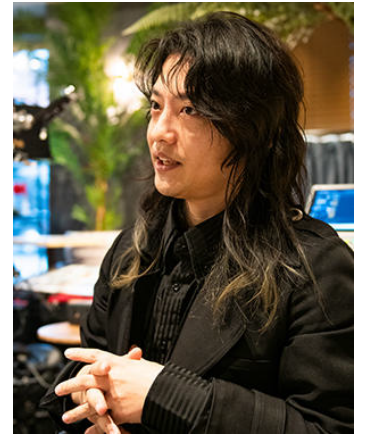
それは、私が今まで会ってきた大人とは違い、いきいきとしていました。

— 世界観が変わったんですね。

吉藤: **やりたいことを続けている人になりたい**と思いました。**みんな違っていいんだ**と。3位に選ばれたことで自信は持てたのですが、私は、ほかの国の高校生のように、「**車いすの開発を死ぬまでやる**」といえるのかと考えてしまいました。肯定感が持てなかったんです。後付けでもいいから、「**この開発のために生まれてきた**」といえるものを探したいと思いました。

— 帰国してから進む道は変わりましたか。

吉藤: メディアで紹介されるなどして知られるようになると、「**こういう車いすを作ってほしい**」とか、「**こういうものは作れるだろうか**」などの**悩み相談を受ける**ようになりました。それまで社会は完成されているものだと思っていたので、**高校生に相談するくらい、世の中って完成されていないんだ**と知り、**自分でもできることがあるかもしれない**という気持ちが湧き上がってきました。ISEFをきっかけに出会いが広がり、高校卒業後は高専を経て、早稲田大学に入学することになったんです。



“孤独の解消”をテーマに。 できなかったことこそ、未来につながる価値がある

— “孤独の解消”をテーマにロボット開発をしようと思われたきっかけは？

吉藤: 車いすに関するいろいろな悩み相談を受けて、私にできることがあるのではないかと思います、**おじいちゃん、おばあちゃん、障がいを持つ方などに話を聞いた**んです。耳が遠くなって人の話が聞きづらくなったとか、年をとって社会のお荷物になっているとか、使いやすい車いすが必要というよりも、**みなさん孤独を感じている**ことがわかりました。私もひきこもり時期には無力感や孤独を感じてとても苦しい思いをしました。こういう感情は本来持つべきじゃないですよね。**どうやったら孤独を解消できるかを研究しよう**と、将来の進む道を決めました。

— ご自身が経験していることにやるべき課題があったのですね。

吉藤: そうですね。**私は人との出会い**を通してひきこもりから抜け出すことができ、**社会とつながることができ、孤独が解消**されました。やりたいこともみわかりました。高専で人工知能の研究をしましたが、**人工知能ロボットでは、根本的な孤独の解消にはつながらない**、やっぱり人との交わりが必要です。**うまくコミュニケーションができないなら、それを仲介するロボットがあればいい**と思いました。

賢いはたらき方のススメ ㊤

— 人と人を仲介するのが分身ロボット「OriHime」なんですね。

吉藤: はい。大学在学中にオリイ研究所を立ち上げ、分身ロボットの研究を始めました。「OriHime」は、人工知能は搭載されていません。人が遠隔で操作しながら動かすもので、まさに分身です。行きたい場所があるのに行けない人にとって、分身として行って、その場を共有できます。離れている人とのコミュニケーションは電話やオンライン会議ツールなどがありますが、それだと離れた場所のまま、孤独は解消されません。「OriHime」の視覚を通して周りを見たり、音を聞くことができるので、そばにいる雰囲気共有できます。共通の体験や思い出を持てるので安心感が生まれるんです。それはまさに私が入院していた時、ひきこもりの時に一番欲しかったことでもあるんです。

— 2021年、東京・日本橋に「OriHime」がサービスを提供するカフェ「分身ロボットカフェ DAWN ver.β」をオープンしました。それから1年半が経ちましたが、実感をお聞かせください。

吉藤: 分身ロボットカフェは、今まで誰もやったことがないことにどんどん挑戦して、お客さんにもそれを感じてもらおうという、研究・実験をする場所でもあります。私はここを通してどんどん失敗をしていきたいんです。

— たくさん失敗していききたいとは?

吉藤: 誰もやったことがない、遠隔操作で動かして接客をし、コミュニケーションをしていく。誰も結果を知らないで、失敗することにすごく価値があると感じています。失敗することで解決策を考えてできるようになる。例えば、我々は空を飛ばしたいと思えば、空を飛ばすために飛行機が作られてきたように、できないことに未来につながる大きな価値があるんです。だから、そのプロセスを含めて、カフェに集うお客さんも含めて一緒に完成形を進めていこうということをコンセプトにしています。現在進行形で、課題が見えたら地下の開発室で研究を重ねて、試していくという試行錯誤をしています。



賢いはたらき方のススメ ㊦

— 「OriHime」はどのような方が遠隔操作されているのですか。

吉藤: 「OriHime」を操作する人をパイロットと呼びますが、歩くことができない、外に出ることができない、ALS(筋萎縮性側索硬化症)で眼球しか動かすことができない方など障がいを持つ方、外出困難な方から、海外に住んでいて日本とつながっていたという方など、**国内外から約70名**のパイロットが従業員として働いています。みんな、社会に参加したいのにできない悩みを抱えていました。そんな人たちに「居場所」と「役割」を作ってあげられるのが「OriHime」です。

— パイロットの方々の反応はいかがですか。

吉藤: みなさん積極的に「OriHime」を介してコミュニケーションしています。私が作ったものを使ってくれるのはとてもありがたいです。**私が作ったもので楽しんでくれることが、私にとっての楽しさ**なんです。

うれしいと思えることを増やせば、生きやすくなる。 寝たきりの先にもキャリアはある

— ロボット開発者として次に実現したいことはなんでしょう。

吉藤: **人生を謳歌できるロボット**を作りたいです。私は「独占」という言葉が嫌いです。特に「役割の独占」ですね。忙しい人は忙しく、そうでない人はスキルアップの機会さえも与えてもらえないのは嫌ですね。**誰もが自分のできごとで何かの役に立てる世の中**を作っていきたいんです。

— それはシェアすることを増やしていくということですか。

吉藤: そうですね。ほかの人よりもできるようになったら**自分の仕事を切り出して次の人に渡していく**ことができればいいと思います。これは高齢者から若者に単純に代替わりをしていくということではなくて、**適材適所で変えていく働き方**を提案していきたいんです。



以前、ALSの患者さんから「これはおいしいから食べて」と言われたことがあります。本人は食べることができないのに、その人の前で「おいしい」って言うっていいのか悩んだんですが、彼は「**自分は食べられないけれど、自分が選んだものを目の前の人がおいしそうに食べてくれる姿を見る**ことが、僕にとって**おいしさ**なんだ」と。だからぜひ食べて感想を聞かせてと。すごいことだなと思いました。その思いと一緒に、**自分の周りの人や仕事仲間が活躍するのはうれしいこと**だなと思うんです。

自分が褒められなくても、自分に関わった人たちが褒められるのはうれしい。そういううれしいと思える存在を増やすことで自信が持て、もっと生きやすくなると思います。研究していく中で**そういう生き方をしていきたい**と思うようになりました。

— 実現できると働き方の選択肢が広がりますね。

吉藤: そうです。私は**寝たきりになっても働きたい**。生きていいと思っていたいんです。**寝たきりの先にもキャリア**はあります。寝たきりになってしまったと**悲壮感を抱くことなく、その先を考えられるように**したいんです。寝たきりの先のことをフランクに話せるようにしたいですね。

分身ロボットカフェがあることで、**我々も体が動かなくなった後に、ここで働いてもいいと思える空間**があるというイメージを持ってもらえる。そういう場所がある未来をめざしています。

賢いはたらき方のススメ🕒



取材時にエントランスで分身ロボットOriHimeを介して接客していたのは、東京2020オリンピックの聖火ランナーを務めた、頸髄損傷による四肢マヒの障がいを持つコーキさん。カフェに入ると「いらっしゃいませ」と声をかけてくれる

取材後記

吉藤さんは、大学生になってまず初めに社交性を身に付けようと行動しました。社交ダンス部や演劇部に所属してひとつずつコミュニケーションの仕方を学んでいったそうです。「孤独を解消する」という自分のやりたいこと、使命とするものが見つかったことで、モチベーションが上がり突き進んでいきます。そして課題を解決するためにいろいろな人のところへこまめに足を運んでいます。吉藤さんは予想をはるかに超える努力家で、自分の感情をきちんと受け止めて真正面から向き合ってきた人なのだと思います。「寝たきりの先のキャリア」をフランクに語る世の中が来ることを期待しています。

プロフィール

吉藤オリィさん

株式会社オリィ研究所代表取締役 所長 デジタルハリウッド大学院特任教授／1987年奈良県生まれ。小学5年生～中学3年生まで不登校を経験。高校時代に電動車椅子の新機構の発明を行い、国内最大の科学コンテストJSECにて文部科学大臣賞、世界最大の科学コンテストIntel ISEFにてGrand Award 3rd を受賞、その際に寄せられた相談と自身の療養経験から「孤独の解消」を研究テーマとする。早稲田大学にて2009年から孤独解消を目的とした分身ロボットの研究開発を独自のアプローチで取り組み、2012年株式会社オリィ研究所を設立。分身ロボット「OriHime」、ALS等の患者さん向けの意思伝達装置「OriHime eye+ switch」、全国の車椅子ユーザに利用されている車椅子アプリ「WheelLog!」、寝たきりでも働けるカフェ「分身ロボットカフェ」等を開発。米Forbes誌が選ぶアジアを代表する青年30人「30 Under 30 ASIA」、2021年度の「グッドデザイン賞」15000点の中から1位の大賞に選ばれる。著書に「孤独は消せる」「サイボーグ時代」「ミライの武器」など。



NTTコムウェア株式会社

URL : <https://www.nttcom.co.jp/>

WEB 掲載 : 2023.4